



中部支部

総会を実施、名大 高田広章教授の講演も

2026年5月15日(金)16時から ザ サイプレスメルキュール ホテル名古屋にてJASA中部支部総会を実施しました。支部長以下15名の会員が出席しました。

総会では、令和7年度事業総括、令和8年度事業計画、行事予定について話し合われました。その後、名古屋大学 未来社会創造機構 モビリティ社会研究所、名古屋大学大学院情報学研究科の高田広章教授をお招きし、講演会を実施しました。

■講演会内容

自動車は「ソフトウェア」で進化する時代へ

一 自動車DXとオープンSDVがもたらす未来 一

・自動車の価値は「ハード」から「ソフト」へ

これまで自動車の価値は、エンジン性能や走行性能、耐久性といったハードウェアに大きく依存してきました。しかし近年、通信技術やAIの進化により、車の価値は大きく変化しています。

具体的には、購入後に機能を追加できる、ユーザーの好みに

合わせてカスタマイズできる、エンターテインメントやサービスを楽しめるといった「体験価値」が重要になっています。特に近年、中国市場では自動車の価値が大きく再定義されつつあります。従来の「移動手段」としての役割だけでなく、居住空間・娯楽空間としての利用が重視されています。



高田広章教授

例えば、車内での動画視聴やゲーム、快適なシート環境など、車内体験の充実が重要な購買要因となっています。ここで重要なのは、この変化が中国特有の現象に留まるのか、それとも世界全体に波及する潮流なのかという点です。もし後者であれば、自動車メーカーは根本的な価値設計の見直しを迫られることになります。

この変化の中心にあるのがSDV (Software Defined Vehicle) です。SDVとは、ソフトウェアによって機能や価値が定義さ

近畿支部

AI技術セミナー、メンタルヘルス総務セミナー開催報告

2026年6月上旬に、近畿支部では、技術担当社員の技術啓発や人材育成、および技術以外の分野へのスキルアップや情報収集に役立てることを目的として、春季技術セミナーと春季総務セミナーの2つのセミナーを開催いたしました。

技術セミナーでは、株式会社コア 関西カンパニー クロスデバイス・イノベーション部の阪口真澄氏を講師にお迎えし、『SLMを活用したエッジAI開発の取り組み』と題してご講演いただきました。講演では、組込み機器におけるSLM(小規模言語モデル)を用いたオンデバイスAIの取り組みに加え、生成AIに背景やルールを渡して要件定義から検証までを回す「AI駆動開発」の実践例が紹介されました。

参加者からは、AIと人間の役割分担や注意点が明確に示されたことで実際の開発プロセスの流れを具体的にイメージしやすく、実務への活用が期待できる内容であったという意見が寄せられました。また、提示された数値成果に対する評価とともに、「AIが作成した設計を人間が吟味し検証する力が今後より必要になる」という講師の指摘に共感する意見も見受けられました。

総務セミナーでは、野嶋社会保険労務士事務所の宮原麻衣子氏をお招きし、『リーダーを守り、社員を守る企業づくり』と題

してご講演いただきました。精神障害の労災請求件数が過去最多を更新する深刻な現状を踏まえ、予測不可能なVUCA時代においてリーダーや管理職が抱えやすいメンタルヘルス不調の特徴から、ビジネススキルとしてのセルフケア、社員を守るハラスメント対策までを体系的にお話しいただきました。

参加者からは、日々の業務の中で何が問題か曖昧だった部分がクリアに言語化され、まずは管理職自身が「自分を労わる」というレジリエンスの重要性に改めて気付くきっかけになったという声が聞かれました。さらに、具体的なセルフケア手法を通じて客観的に自分を守る術を学ぶとともに、リーダー層が元氣であることが組織の安定や社員の働きやすさに直結することを深く実感させられるといった意見も寄せられました。

今回の春季セミナーは、最先端の技術トレンドであるAI駆動開発と、それを現場で運用・推進する人と組織のメンタルヘルスという会員企業の皆様にとっても関心の高い2つのテーマに焦点を当てた企画となりました。近畿支部では、今後も会員企業の皆様が抱える技術的・組織的な課題に寄り添い、業界全体の発展を支える有益な情報発信と交流の場を提供してまいります。ご多忙のところご登壇いただいた講師の皆様、ならびにご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

れる自動車を指し、OTA (Over the Air) によるアップデートによって、購入後も継続的に進化する点が特徴です。自動車はもはや「完成品」ではなく、「使い続けながら進化していく製品」へと変わりつつあります。

・オープンSDVとビークルAPIが切り開く未来

SDVの次の段階として注目されているのがオープンSDVです。これは、自動車メーカーだけでなく、その他の企業や開発者が自動車向けアプリやサービスを開発できる仕組みで、自動車を「サービスのプラットフォーム」へと進化させる可能性を持ちます。

一方で、この実現には重要な課題も存在し、特に大きいのは「安全性」と「責任の所在」です。自動車は人命に関わる製品であり、自由な開発環境と安全性の両立が不可欠となります。

この課題を解決する鍵がビークルAPIです。ビークルAPIは、アプリが車両機能を安全に利用するための共通ルールであり、標準化が進むことで車種を問わずアプリが動作し、開発を効率化することが見込めます。現在、名古屋大学を中心とするOpen SDV Initiativeでは、60社以上の企業と共にビークル



广汽トヨタ(広州汽車とトヨタ自動車の合併)が中国市場向けに展開しているbZ3Xの Cockpit

APIの設計や実証、技術者育成を進めています。

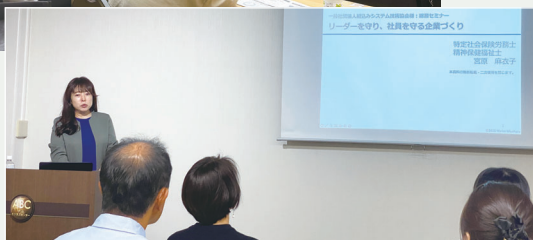
スマートフォンの普及が産業構造を大きく変えたように、自動車業界も今まさに転換点にあります。SDVとオープンSDVは、単なる技術革新ではなく、自動車の未来を左右する重要なテーマです。



技術
セミナー



総務
セミナー



関東支部 異業種交流会 BBQ Party in 新宿 開催報告

2026年5月23日(土)、BBQでらす 御来光にて「異業種交流会 BBQ Party (関東支部)」が開催され、12社40名が参加しました。

当日は、若手社員を中心に積極的な名刺交換や交流が行われるなど、企業の垣根を越えたコミュニケーションが活発に見られました。終始和やかな雰囲気の中で大いに盛り上がり、参加者同士が新たなつながりを築く貴重な機会となりました。また、引き続き開催された二次会にも30名以上が参加し、業界内の横のつながりや情報交換の重要性を改めて実感する場となりました。

参加者間の交流も一層深まり、今後のさらなる連携や協業につながることが期待される有意義なイベントとなりました。



プラグフェスト実行委員会

第29回日本プラグフェスト開催報告

第29回日本プラグフェストを開催いたしましたので報告いたします。

日本プラグフェストは、同一のインターフェース規格を使用するメーカー同士が、相互運用性を検証するための技術イベントです。参加チームの多くが、ゲームモードや4K/8K対応の最新機能を搭載した機材を持ち込み、市場トラブルを未然に防ぐ為、実際のユースケースを想定し、複数の機器を同時に接続するシステム試験を事務局で設定し、接続試験を実施。各参加メーカーの機器から数多くの想定外の挙動が検出され、とても有意義な機会を提供することが出来ました。



AI研究WG

AIセミナー成果報告会

「トマトの成熟度の自動判定」が優秀賞、各グループが面白いお題に挑戦

2026年3月18日にオンラインでAIセミナー(AI研究WG)の成果報告会を行ないました。今年発表したのは3グループでした。発表内容を簡単に紹介します。

まず1つめのグループは「AI(機械学習)を用いたトマトの成熟度の自動判定」です。既存のデータセットを用いて3層CNNと、Mask R-CNNを用いたインスタンスセグメンテーション(画像内のオブジェクトを個体ごとに識別し、その形をピクセル単位で正確に切り抜く技術)で判定を試みました。3層CNNではデータセットだと問題がないものの、実データでは認識が良くありませんでした。一方Mask R-CNNを用いたインスタンスセグメンテーションでは、実データでも認識できていたのが印象的でした。写真はKaggleで公開しているトマトの成熟度用のデータセットです。下が未成熟で上が成熟してるデータです。ちなみにMask R-CNNは、物体の正確な輪郭(マスク)までピクセル単位で切り抜くことができるAIモデルです。

次のグループは「ソースコードでCPT(継続事前学習)したLLMをコーディングエージェントで使う」発表をしてくれました。LLMの学習は時間やコストもかかるのですが、果敢に挑戦してくれました。思ったように精度は上がりませんが興味深い発表になっていました。

最後のグループは「コンウェイの逆ライフゲームを通じてCNNとSNNの違いを確認」という発表でした。ある状態から次の状態



へのルールが決まっているコンウェイのライフゲームで、任意の場面から前の場面を推測するモデルを作成してくれました。CNNもSNNも実際の場面を導出できなかったのですが、選んだお題がおもしろく見応えのある発表になっていました。ちなみにSNNは、人間の脳の仕組みを真似て、電気スパイクのタイミングで情報を処理する省電力型ニューラルネットワークです。

今どきのLLMであったり興味を抱いているものであったり、おもしろいお題に挑戦してくれていて発表を聞いているのが楽しい報告会でした。最終的に結果が優れていた「トマトの成熟度の自動判定」が優秀賞に選ばれましたが、どのグループが選ばれてもおかしくない成果でした。2026年度も6月24日からAIセミナーを開始しました。来年の成果報告会もどのようなお題を選んでくれるのか今から楽しみにしています。

【会期・場所】

会期：2026年6月4日(木)～5日(金)
場所：京都府民総合交流プラザ 京都テルサ
主催：一般社団法人組込みシステム技術協会(JASA)

【目的・特徴】

同一インターフェース規格(HDMI)を持つ製品間の相互運用性を検証し、確実なものとする事で、不具合解消や品質の向上を目的としています。参加メーカは、ソース機器¹、シンク機器²、リピータ機器³に分かれ、自社製品と他社製品との接続を行い、通信・映像・音声・暗号化検証において規格に準拠した通りの挙動となっているか、安定的な接続がなされているか等、細かく検証します。また日本プラグフェスト独自の試験項目を策定し実施することで、参加メーカ全体の品質向上を促しています。

【参加メーカ・機種】

- 参加メーカ 15社 39名
- 参加機種 シンク機器 7機種(TV、プロジェクタ等) / ソース機器 6機種(BDレコーダ、ゲーム機等) / リピータ機器 5機種(AVアンプ、AVレシーバ等)

【試験方法】

システム試験

- ソース・リピータ・ソースの複数チームと接続する試験
- 日本プラグフェスト独自の試験を用い、一般家庭での複雑な機器の組み合わせを再現
- 1スロット90分

【参加者からのご意見・ご要望】

『毎回接続イベントを開催していただき、事前準備から運営、撤収まで、お忙しい所本当にありがとうございます。様々な企業との交流も得られていい会でした。』

『東京、京都だけでなく名古屋などの中部地方での実施も検討いただきたいです。』

『成熟したと思っていましたが、様々な検証を他社様とすることで課題の発見につながりました。ありがとうございます。』

『90分という対戦時間に関して適切であったと感じています。それぞれの対戦時間の間に少し休憩時間があるとよりよいと感じました。』

【次回の予定】

- 日時 2026年11月26日(木)～27日(金)
 - 場所 地方独立行政法人 東京都立産業技術研究センター
 - テスト規格 HDMI
 - 参加資格 HDMI搭載機器メーカおよび、ケーブルメーカ
 - 参加料金 1名 22,000円(税込)
- 詳細につきましては、日本プラグフェストHPにてお知らせいたします。
(<https://www.jasa.or.jp/plugfest/2026autum/>)

- 1) デジタルコンテンツを出力する機器 (BDレコーダ、デジタルカメラ等)
- 2) デジタルコンテンツを受信し表示する機器 (TV、プロジェクタ等)
- 3) ソース機器とシンク機器間で、信号の再送信等を行う中継機 (AVアンプ等)

OSS活用WG

ハンズオン成果報告会 「自転車向け運転監視端末」が優秀賞、 見ていて楽しい報告会

2026年3月27日(金)にオンラインにてOSS活用WG ハンズオンの成果報告会を行ないました。今年は3チームでの発表となりました。発表内容を簡単に紹介します。

1つめのグループは「スマートホームデバイス」です(写真下)。ペットドアの自動ロック開閉システムで、RaspberryPiにRFIDリーダーとドアロック開閉用のサーボモータを接続し、RFIDを読み取るとドアロックを開錠するようなシステムを作成しました。3Dプリンタで実際にドアロックを作成するなど、製品イメージを持ちながら作成していたのが良かったです。

2つめのグループは「洗濯物乾燥システム」です。RaspberryPiに温湿度センサを接続し、洗濯物の乾燥度合いを判定しBluetoothスピーカーで音を鳴らしお知らせするという物でした。露点で乾燥具合を測る発想が面白いと感じた発表でした。

3つめのグループは「自転車向け運転監視端末」です。M5Stackに9軸加速度センサ・GPS・心拍センサを接続し、自転車の走行データを取得するシステムでした(写真上)。こちらも3Dプリンタで筐体を作成し、実際に自転車に取り付けてデータを取得し、そのデータを上手く可視化出来ていて、システムとして良いものが出来ていたと感じました。ちなみにM5Stackはディスプレイ、ボタン、無線通信モジュールなどを搭載した5cm角のモジュールです。

3Dプリンタを使ってモノを試作し、実践をするなど、製品をイ



メージしたような挑戦があり、見ていて楽しい報告会でした。どのチームの発表も良かったのですが、システムとして完成度が高かった「自転車向け運転監視端末」が優秀賞となりました。2026年度もどのようなシステムを検討・作成してくれるのかを楽しみにしています。